右うまや、左ざしきなどという別はあるが、ざしきとかって、にわの三つに大きく区分されて、それをさらに細分化するというようになっている。にわとかっては、土間であった家もあったが、まずかってに床がはいり、現在はにわも、全部か半分は床の上っている家が多くなっている。

ざしきは一間か、北裏を納戸といって主人夫婦の寝部屋にし、表と裏を区切っているもの、これをさらに複雑にして、殆ど不均等な畳割の田形、四部屋に分けているのがある。その場合、奥の北裏が奥座敷、前の納戸表を中の間などといっている。奥座敷北裏には縁のついている場合が多く、肝煎の役宅などでは、奥座敷の床の裏に、かみせっちんとか、風呂場などをつけていたのもあった。明治以後の改装の際、その多くは取り除かれ、物置きなどに転用されているのがみえる。

かっては、おまえともいっている。分家に対して本家もおまえというから、表の座という意味で、普通の来客を接待する、母屋の中心の間である。多くは一〇数畳の大広間で、その中央、にわ寄りに炉があるのを普通とした。このかってまで土間であり、炉があさ炉であった家もあり、納戸を、このかっての奥に出張って設けているのさえあった。仏壇も多くは、このかってにあり、炉の上へりに沿うて畳一段の厚さだけ、にわ寄りを低くし、そこに中じきりをしている家が多い。めくらじきりなどとも呼んでいる。その場合低い方は板敷きで、むしろやござなど敷いておく家が多かった。

明治末頃から、大正初期にかけて、このかってに改装を行なったのが目立つようになった。恐らく実用化と個室の細分化を、冬の保温や、接客などから工夫した間取りの変化であると思われる。まず表の座と裏の座の間に新に中じきりを置いて、ここに戸・障子をたて、裏を台所につづく板の間、家族のより集る炉、子供の冬の暖をとるこたつなどの薄暗い部屋に仕切ったことである。多くは北側に出格子などがあり、冬の雪囲いなどした場合